

# 京都立本寺の法華経写経

中 尾 堯

具足山立本寺は、京都市の上京区七本松通仁和寺街道上一番町にある日蓮宗本山（由緒寺院）の一つで、妙顕寺の僧日実によって、明徳四年（一三三三）、洛中の四条櫛笥に開創された。後、豊臣秀吉の命により京極今出川に移ったが、宝永五年（一七〇四）の大火によって焼失し、現在地に移転復興した。草創以来五百七十余年の間に、二度にわたる転機があったが、数々の貴重な寺宝が宝蔵に納められて今日に伝わっている。

このたび、立本寺に伝来する文化財の調査にあたり、とくに注目される平安時代後期から鎌倉時代にかけての『妙法蓮華経』の写経と、曼荼羅図を取り上げた。その研究成果として『妙法蓮華経金字宝塔曼荼羅』（国重要文化財）・『藍紙妙法蓮華経』（国重要文化財）・『妙法蓮華経』<sup>(1)</sup>について報告する。

## I 『妙法蓮華経金字宝塔曼荼羅』

立本寺に伝来する『妙法蓮華経金字宝塔曼荼羅』とよばれる八幅の曼荼羅図は、鎌倉時代にあたる十三世紀初頭に制作された優品で、『紺紙金銀泥法華経宝塔曼荼羅図』の名称で國の重要文化財（絵画部門）に指定されている。『妙法蓮華経』Ⅱ『法華経』八巻に盛られた物語を、各巻ごとの経文と経絵によって描きあげ、八幅の掛け幅に仕立てたのが、この曼荼羅図である。

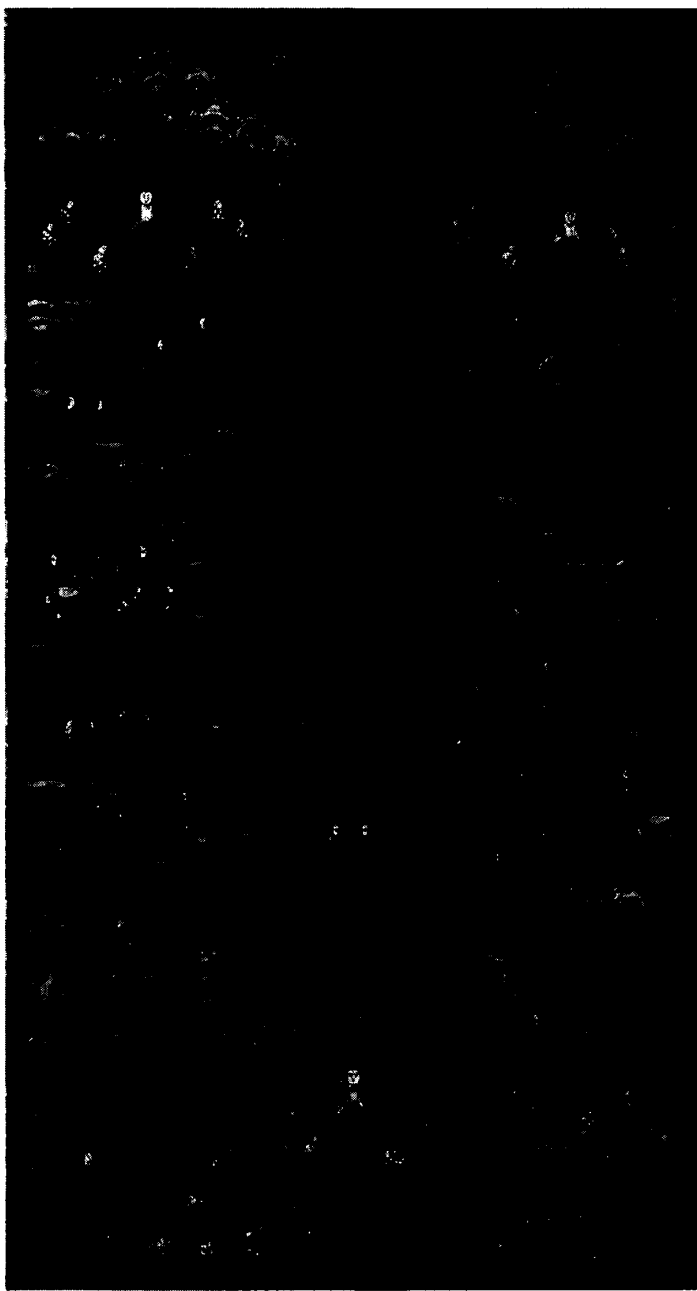
浄土を象徴する紺青の色をあらわす紺紙を料紙として、金色に光り輝く九重の宝塔を、画面の中央に堂々と描きあげる。この塔を構成するすべての描線は、金泥で書かれた細字の法華経の経文が連綿と連なって、おのずから金色の線をなしている。宝塔第一層の扉が左右に開かれると、靈鷲山上の宝座で法華経の説法をなされる釈迦如来と、その説法がすべて真実であると証明される多宝如来

が、光明に包まれながら塔中に並んで座するという、有名な『法華経』見宝塔品の姿である。

九重の宝塔をめぐって、それぞれの巻に説かれている説話を題材とする、いわゆる経意絵が金銀泥で左右に描かれている。それぞれの場面の肩にあたる部分に短冊形の枠があり、経絵の意味を示す经文の一節が端正に抄出され、絵解きに適するように構成されている。料紙を紺青に染めた濃い色の紺紙は、そのまま経絵の背景となつて深く澄み渡つた虚空をあらわし、物語が展開する深山の連なりは、釈迦如来が『法華経』を説いたインドの靈鷲山を表現している。

仏堂内にさしこむ淡い太陽の光を受けて、金銀にきらめく八幅の『妙法蓮華経金字宝塔曼荼羅』は、実に圧巻であった。その図を前にして、説法僧が語る『法華経』の修行と靈験の物語に、人々は深い感動を味わつたことであろう。このように優れた作品が、八百年の長い歳月を越えて、一幅として欠けることもなく完全な姿で今日に伝来したことは、まことに意義深いことといえる。

鎌倉時代の初期、十二・三世紀の交に制作されて、今日では立本寺に伝来する『妙法蓮華経金字宝塔曼荼羅』八幅は、もとは大和



妙法蓮華経金字宝塔曼荼羅 第一幅

國（奈良県）の法隆寺にあったことが、表装の裏面に記された修理銘によって窺われる。江戸時代の初期に三度目の修復をするにあたって、前回の修理銘のある部分を細長く切り取り、新しい表装の裏に貼りつけられている。ここには、次のような修理銘が貼られたとされている。

法隆寺上宮王院北室之重宝、不可出渡于他所者也、康安二年甞七月下旬比、奉修復之畢

（訳）法隆寺の上宮王院北室の重宝、他所に出し渡すべからざるものなり。

康安二年（一三六二）七月下旬のころ、これを修復（復）し奉りおわんぬ。

この記事によると、『妙法蓮華經金字宝塔曼荼羅』八幅は、もと法隆寺の上宮王院に属する北室の重宝として、厳格に護持されていたことがわかる。

法隆寺の上宮王院とは、東院伽藍のことである。ここは、聖徳太子の等身像と伝える救世観音をまつる、八角堂の夢殿を中心とする伽藍で、聖徳太子信仰の拠点であった。斑鳩の宮に住む聖徳太子は、しばしば夢殿とよばれるこの堂にこもって瞑想したという話は有名である。

夢殿の背後には、延久元年（一〇六九）に舍利殿絵殿が建立され、太子の絵伝が壁面に描かれ、七歳の童子形の座像を安置している。舍利殿絵殿の背後には、講堂にあたる場所に、橘夫人の住宅を移築したという伝法堂があり、さらにその北側の土塀に囲まれた部分が北室である。『妙法蓮華經金字宝塔曼荼羅』八幅は、「他所に出し渡すべからざるものなり」と、他所に持ち出すことを厳しく禁じられて、この北室に襲蔵されていた。その見事な出来栄からみても、まさに上宮王院北室の重宝にふさわしいものであった。

聖徳太子の事績として伝えられるもの一つに、『三経義疏』の撰述がある。それは、『法華經義疏』『維摩經義疏』『勝鬘經義疏』で、とくに『法華經義疏』は後世の仏教に深い影響を与えた。鎌倉時代に、聖徳太子を倭國の教主と仰ぐ「太子信仰」が盛んになると、太子伝承と『法華經』の信仰が密接な関係をもつようになった。

このような趨勢は法隆寺においてはなお一層で、太子信仰の高まりとともに、法華經に対する信仰が盛んになる。その『法華經』の教えによる修行と靈験の物語を、視覚によってわかりやすく説き理解するために、『妙法蓮華經金字宝塔曼荼羅』が描かれることになった。

鎌倉時代の初期から盛んになった聖徳太子信仰を背景に、法隆寺伽藍の修理と整備がとみに進んだことはよく知られており、「妙法蓮華經金字宝塔曼荼羅」もこのような雰囲気の中で制作され、太子ゆかりの堂に掲げられたのである。

この『妙法蓮華經金字宝塔曼荼羅』が、法隆寺の東院に伝来していたことについては、『聖徳太子伝暦』の注釈書として知られる『太子伝玉林抄』の記事によってわかる。本書の巻第十九には「註進法隆寺問寺御舍利殿宝物以下目録」という項目があり、これに続く「後代安置物等事」に次の記事がある。

一、法花八塔八鋪箱ニ入之

この記事こそ、『妙法蓮華經金字宝塔曼荼羅』が東院の什物であることを物語ると、宮次男氏は指摘する。さらに東院の宝物を、前後四回にわたって点検した「舍利殿宝物注文」には、これとほぼ同じ記事がある。この四回とは、天文十九年（一五五〇）・天正十九年（一五九一）・慶長十四年（一六〇九）・慶安五年（一六五二）の宝物確認作業の事である。このうち、天正十九年（一五九一）ものには、「先年沾却」と追筆で注記されていて、この後間もなく惜しくも売却されたことを物語っている。<sup>(2)</sup>

『妙法蓮華經金字宝塔曼荼羅』八幅は、近世初頭に売却されて法隆寺の東院をはなれ、しばらく後に京都の日蓮宗立本寺の宝蔵に移った。これまで納められていた木箱は、損壊が進んでいたからであろうか、廃棄されてしまっただけで現存しない。

法隆寺北室の重宝であった『妙法蓮華經金字宝塔曼荼羅』八幅が、経済的な理由によるものであろうか、ついに売却されてこの立本寺に移ったのは、江戸時代初期のことであった。このことを物語るのが、表装の裏面に記された天和元年（一六八二）の次のような修理銘である。

上宮太子御真翰、於武州江城、奉修復之者也 立本寺廿三世

天和元年辛酉霜月十三日

日通（花押）

ここでは、「聖徳太子が御みずから執筆された、この『妙法蓮華經金字宝塔曼荼羅』八幅を、武蔵野國の江戸城で修復（復）し奉った」事を記し、修復が完成した天和元年（一六八二）辛酉十一月十三日の日付と、立本寺廿三世の貫主「日通」と記して、花押を据えている。修復が完成したこの十三日は、宗祖日蓮の月遅れの命日にあたる。

この『妙法蓮華經金字宝塔曼荼羅』八幅を修理するに至った事情は、重宝として大事に扱われたとはいふものの、三百二十余年にもわたる長年月の間に、表装の傷みが目立ってきたことによる。全体の表装を解装したうえで、立本寺の堂舎を念頭にいれて、新に

仕立て直したのであろう。それは上等な材料を用いた実に丁寧な作業で、今日に至ってもなおしっかりと本紙を保護している。

こうして修復が完了した『妙法蓮華經金字宝塔曼茶羅』八幅は、新に作製した、唐草に靈鳥をあしらった構図の蒔絵を施した、豪華な印籠箱に丁寧に納入されている。この内箱は、さらに棧蓋式の白木の外箱に入っていて、蓋の表には箱書きと貼り紙がある。

（箱書き）

「法華經文字之宝塔八軸

本山立本寺什宝」

（貼り紙）

「昭和五十二年

一九七七年 重要文化財指定品」

箱書にみるように、立本寺では八幅の曼茶羅図を「本山立本寺什宝」として襲蔵し、「法華經文字之宝塔」とよんでいた。この曼茶羅図が帯びる、文化財としての高い価値を見出されたのは、東京文化財研究所の宮次男氏で、昭和五十二年には國の重要文化財に指定された。

天和元年に『妙法蓮華經金字宝塔曼茶羅』を購入し、修復を発願した立本寺住持は、第二十三世貫主の正善院日通である。『日蓮宗事典』に収められた日蓮宗諸寺の歴代譜によると、日通は、元和七年（一六二二）に生まれ、出家して号を月山といい、東山檀林の玄能をつとめた後に松ヶ崎檀林の第十四代化主となった。さらに、伏見区深草の宝塔寺十二世から立本寺に進んで二十三世貫主となり、退いて右京区鳴滝三宝寺四世となり、元禄十四年（一七〇二）六月三日に、七十歳で没している。

正善院日通が立本寺貫主であったころは、寛文元年（一六六一）に伽藍が焼失し、これを説法の名手として知られる日審（一五九八～一六六六）が復興して、寺院の勢いもようやく盛んになったころである。立本寺の法灯をより高く掲げるために、相当多額の資財を投じて、この『妙法蓮華經金字宝塔曼茶羅』八幅を購入したのである。

秘宝ともいうべき『妙法蓮華經金字宝塔曼茶羅』の修復は、厳格な管理のもとに慎重に行わなくてはならない。修理銘によると、修復の作業は「武州江城」において実施したとあるが、その場所は武蔵國江戸城中であるかどうかはわからない。もちろん町屋の中にある表具職人の工房であるはずはなく、護衛の厳しい大名の下屋敷で作業を進めたのかも知れない。この修復事業は、思いの外の

大事業であった。

『妙法蓮華經金字宝塔曼荼羅』八幅の表装の裏面には、修復事業の施主に関するもう一つの記事が、各巻にわたって繰り返して記されて注目される。それは、この修理事業が大名家の援助を受けながら実行されたことを物語っている。

八幅表具之寄進主 中川佐渡守久恒公御息女 俗号左津女

于時仙石越前守政明公御内室 法号清耀院円珠日浄

(訳)『妙法蓮華經金字宝塔曼荼羅』八幅の表具の費用を寄進した施主は、中川佐渡守久恒公の御息女で、俗号は左津という女人である。

この時に、仙石越前守政明公の御内室で、法号は清耀院円珠日浄という。

中川佐渡守久恒は、現在の太田県竹田市にあたる、豊後國岡藩(竹田藩)の第四代藩主で、『中川史料集』によると、元禄八年(一六九五)に五十五歳で没した。その室は佐阿といい、宝永三年(一七〇六)に六十三歳で没し、日蓮宗の江戸触頭三ヶ寺の一として知られる、谷中の瑞輪寺に葬られている。法名は長寿院殿妙応日慶大姉といい、法名に「日号」をもつ日蓮宗の信者であった。

この修理銘にあらわれる「左津」は、中川久恒と室の佐阿との間にできた長女で、万治三年(一六六〇)二月二十九日に江戸で生まれた。延宝四年(一六七六)に、信濃國上田藩主の仙石越前守政明のもとに嫁したが、後、宝永三年(一七〇六)の国替えによって但馬國出石藩(兵庫県出石郡出石町)に移っている。

左津の法号は清耀院円珠日浄(「中川氏系図」では院号が清光院となっている)で、没後に江戸の三田大乘寺(後に永隆寺と改めたが現存しない)に葬った。法号に日号を称することから日蓮宗の信者であったことがわかる。『妙法蓮華經金字宝塔曼荼羅』修復の完成をみたのが天和元年(一六八一)のことであるから、左津がこの事業の施主となった時期には、仙石政明はまだ上田藩主として江戸の藩邸にあった。

このように、修復事業に関わった人脈をみると、日蓮宗の信者に連なることが注目される。つまり、中川佐渡守久恒の内室の佐阿は日蓮宗の信者で、仙石越前守政明の内室となったその息女の左津も日蓮宗である。また、仙石越前守政明も、出石に移封の後には日蓮宗となり、城下の同じ宗派の本高寺を菩提寺として、墓塔を営んでいる。

これより先、日蓮宗では、幕府の供養を受けるべきか否かという、いわゆる不受不施論争が盛んに戦わされた。それは宗内を二

分した激しい抗争となり、ついには幕府を舞台とする政治問題にまで発展する。

寛永七年（一六三〇）二月二十一日、受不施を主張する身延久遠寺の日遍と、池上本門寺の日樹を中心とする不受不施派との対論が、江戸幕府を舞台に行われた。世にいう「身池対論」がこれである。その結果は、幕府から一方的に不受不施派の敗北と判定され、厳しい弾圧が加えられた。日樹に従う不受不施派の僧たちは、それぞれ罪を着せられて各地方に流された。

このときに、碑文谷法華寺住持の日進は、寺を追放されて信州上田に流されて藩主仙石政俊の預かりの身となった。しかし、仙石政俊は深く日進に帰依して住庵を建て、これがのちに発展して妙光寺と名を改めた。この仙石政俊の子息が仙石越前守政明である。<sup>(3)</sup>

江戸時代前期における、仏教信仰をめぐる動向の中で、上田藩主の仙石政俊・政明父子と、中川久恒の内室佐阿とその息女左津は、日蓮宗の法華經信仰の意志を強く抱くようになった。この度の修復事業の施主となった女性「左津」は、このような法華信仰の雰囲気の中にいた。

仙石家の法華信仰が、立本寺に新しく購入されて寺宝となった『妙法蓮華經金字宝塔曼荼羅』八幅を、京都に優れた修復技術があるにもかかわらず、わざわざ江戸に運んで修復させたのに違いない。聖徳太子ゆかりの法隆寺東院に伝来したことから、「上宮太子御真翰」と呼ばれるようになったこの八幅の修復作業は、上田藩の藩邸での厳重な管理態勢のもとで進められたのであろう。

次に宝塔の構図について述べよう。紺紙に金銀泥で描きあげられた『妙法蓮華經金字宝塔曼荼羅』八幅は、九重の宝塔を中央に屹立させ、その周囲に法華經の説話絵を配置するという、全体として同じ構図をもって構成されている。その一幅は、濃紺に染めた上質の鳥の子紙六紙を縦長に継いで、精巧に描写している。料紙の寸法は八幅とも同じで、天地が一一・三センチ、幅五八・五センチの規格である。

二度にわたる修復作業も厳密なもので、継ぎ目もほとんどわからないほどの高い技術を誇っている。しかも、全体に損傷がまったくないといつてよく、したがって後世での加筆や書き入れも一切認められず、とても大切に扱われてきたことが窺われる。銀泥で描写されている部分が全体的に酸化しているのを除くと、ほとんど制作された当時の姿を目の前にする思いである。

中央に描きあげられる九重の宝塔の姿は、八幅ともまったく同じで、第一層の扉が左右に開かれ、金色に輝く釈迦如来と多宝如来が並座する。これは、あらかじめ型紙を短冊型に仕立てた紺紙にあてて、角筆をもって緻密な型取りをしたであろう。この押し型に沿って法華經の文字を細く連ね、おのずから描線をなして描きあげた宝塔は、『妙法蓮華經』見宝塔品第十一の情景を見事にあらわ

している。見宝塔品の冒頭には、大地の中から出現した宝塔と、供養を捧げる姿を、美しく謳いあげる。

その時に、仏のみ前に七宝の塔在り、高さ五百由旬、縦広二百五十由旬にして、地より涌出し、空中に住せり、種種の宝物をもつてこれをかざり、五千のてすりありて、室は千万なり、(中略) 三十三天は天の曼陀羅華を雨らして、宝塔を供養し、余の諸の天・竜・夜叉……千万億の衆も、一切の華・香・瓔珞・幡蓋・伎楽をもつて、宝塔を供養し、恭敬し、尊重し、讃嘆せり、

幅の通減率の少ない宝塔各層の屋根はとてもスマートで、最頂の九輪は天を貫いてそびえ立っている。並座する釈迦如来と多宝如来の頭上は、黄金の天蓋と瓔珞で荘嚴され、軒先には風鐸が風に鳴っている。各階の緑の連子窓は朱で縁取られ、金銀泥で光り輝いている。頂上の九輪の周辺には、天衣をなびかせた三十三天が曼陀羅華をふらし、笛や鏡鉞は飛翔して天上の音楽を奏でる。

塔中の多宝如来は、釈迦如来の説法を讃えて「善哉善哉、釈迦牟尼世尊、如所説者、皆是真実(善いかな善いかな 釈迦牟尼世尊、所説の如きは、皆これ真実なり)」と、証明を加える。釈迦如来は、「誰かよくこの娑婆世界において、広く妙法華經を説かん、(中略) 仏はこの妙法華經をもつて付囑して、とどまることあらしめんと欲するなり」と、大音声で示した。

釈迦如来の説法を讃え証明するために、大地から涌出して虚空に浮かんた金色に輝く宝塔を、『妙法蓮華經』八巻の巻数にちなんで、各一基を八幅の絵画に描きあげた。「如来の全身います」という塔に寄せる思いは、塔と金堂を並置する法隆寺の伽藍に、まことに相応しい構図であったはずである。

『法華經』の宝塔を、經文の文字列で描くのは、写經の功德を得るためである。仏法、とくに『法華經』の修行には、「五種法師」といって、受持・読・誦・解説・書写の五つの実践が求められている。その書写の功德を得るとともに、塔のなかの仏を經文によって荘嚴し供養しようというのが、文字塔の願意である。各巻の頂上から書き始める經文は、塔身を経めぐって底部の階に終わる。

宝塔をめぐって描かれた説相図は、釈尊が靈鷲山の山頂で説法をされていることを念頭において、全体の構図をまとめている。『妙法蓮華經』巻第一の最初は「序品第一」で、靈鷲山上に端座された釈尊が、眉間から光明を放って、東方万八千の世界を照らし出される姿を、九重の宝塔の基部に描いて、物語の始まりを告げる。

説法の座の左側に背景として描かれている山は、鷲頭の形をしていて、靈鷲山の特徴的な山容をあらわしている。説法場に並び居る人々の前に、三個の円形車輪が描かれているのは、いま釈尊が説法をされつつあることを表現する、「転法輪」の印である。



積尊説法の図は、巻第八の終章にも同じような構図で描かれている。しかし、巻第一の説法図と比較すると、白毫から四周に放たれる光明はなく、積尊を囲繞する菩薩や聴聞の衆も地味に描かれていて、静寂の雰囲気は漂う。それは、仏教の極意を示す法華經の教えを説いた積尊が、いまや説法を終えてふたたび禪定に入ろうとする姿を、図の色調によって巧に表現している。靈鷲山上で積尊が説いた『法華經』の「起」と「結」を、序章と終章に描いた二つの説法図で示している。

九重の宝塔を囲んで描かれる説相図は、大筋としては各品の順序にしたがって、塔の右から左へと続く。また、各品の説相図は、説話の筋書きにしたがって、下から上に向かって展開する。しかしこれは原則であって、実際には上下・左右に混在するものが多い。それは、仏教の世界観にもづく十界の思想による。

画題をよく観察すると、下から上に向かって、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏という順序で、気を配りながら配列された一面がある。とくに、地獄・餓鬼・畜生・修羅の場面は極端に少なく、描かれるにしてももともと底の部分に位置付けられている。最上段には、深く高い山を背景とする図が多いのも、積尊が靈鷲山上で法華經を説いたという故事を象徴的に物語っている。

ここに描かれた画題を全体的にみると、「法華七喻（七つのたとえ）」が重要な画題の一つとなっている。山林のなかに堂閣が構えられ、聴衆の前で仏の説法が続く、大地から宝塔が涌出して行者がこれを恭敬礼拝するなど、靈驗に満ちた物語が展開する。ここに登場する仏菩薩や修行者の顔が、金泥と銀泥に塗り分けることによって、その表情と周囲の雰囲気微妙に表現され、物語りに生命を与えている。

九重の宝塔を囲んで描かれた『法華經』の説相図は、仏教を象徴する唐草をあしらった細い帯状の絵を周囲にめぐらし、枠組みとされている。妙なる天上の音楽が聞こえ、快い香気が薫る金色の風光のなかに、釈迦如来の美妙的な説法の声が続く、靈的な八幅の絵画である。

この曼荼羅図の原作者は、『法華經』の説相と思想について深く検討した上で、画題の緻密な配置をおこなっている。『法華經』が日本に将来されてから六百年の間に、この經典をめぐる研鑽は大いに進み、その信仰は広く社会に定着して、「法華經文化」ともいふべき独特の信仰世界を形作ってきた。このような伝統を背景にして、『妙法蓮華經金字宝塔曼荼羅』八幅はみごとに出来栄を見せる。

各幅の表装上部には、紺紙に竜の文様をあしらった題簽が貼り付けられ（ただし第三幅は除く）、「妙法蓮華經卷第一」・「妙法蓮華經卷第二」というように、収められた巻数が記されている。八巻本の「法華經」の巻数と、「妙法蓮華經金字宝塔曼荼羅」八幅の各幅に収められた画題は、まったく一致している。

## Ⅱ 藍紙「妙法蓮華經」開結一部十巻の内七巻

「妙法蓮華經」開結一部十巻からなる卷子本の写経で、開経・第二巻・六巻の三巻が失われ、残る七巻が伝来している。表紙の題簽に経題と巻数が記され、本紙には藍紙を料紙ともしちいた裝飾経である。跋文によって十一世紀後半に成立したことが知られ、平安時代後期の写経として国の重要文化財に指定されている。

この藍紙「妙法蓮華經」には、全体にわたって白書・朱書・墨書の三種類の訓点が入念に施され、加点の親本が跋文に銘記されていることから、国語学上でも注目を集め、研究が進んでいる。寺伝では小野道風の筆と伝え、巻第一の表紙見返しには、次のような一文が染筆されている。

「妙法蓮華經卷第一」見返し修理記

奉修道風法華經記

洛西立本寺有「野道風所書法華經」運筆温厚位

置森嚴 蓋雖<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>之 華人多不<sub>レ</sub>可得焉 本是開結

二經正十巻也 惜哉 逸<sub>レ</sub>開経及第二巻第六巻<sub>一</sub> 今

所<sub>レ</sub>存七巻 而中尚闕<sub>レ</sub>數品<sub>一</sub> 且歲月悠遠 蠹魚標



藍紙「妙法蓮華經」第一巻（重要文化財）

粧剥落矣 僕悲其久而益損失 請貫首啓上人 以

修飾之 合紙於裏 用紺絹為之標 希後人之不吝

疑也 故一語誌其首云

明和九年辰秋九月

平安 三宅芳隆謹記

この文意によると、洛西立本寺の所有に帰していた、小野道風の筆といわれたこの法華經写經の文字が、実に端正で優美であると高く評価され、得難い經文とみられていたことがまず分かる。それも明和九年（一七七〇）秋には、十巻のうち「開經および第一巻・第六巻」がすでに欠失していたし、虫損や表装の破損も目立つ状態であった。これを見た三宅芳隆は、早速修理を發願して貫首の日啓上人に請うて、全体に裏打ちを施し、紺絹の布をもって表装した。

このような修理記の文言から見ると、近世中期の早いころには、藍紙『妙法蓮華經』はすでに立本寺に買得されていたことが窺われるものの、それ以上の伝来については明かにできない。恐らく、日蓮宗寺院が経済的に近世初頭の豊かな時期に、他から購入されたのではなからうか。

三宅芳隆の發願によって実施された修理は、まず全体にわたって薄紙で丁寧な裏打ちをした上で、紺染めの絹地の表紙と軸首をつけている。表紙には題簽に經名と巻数を墨書していて、見返しには金箔を散らしている。軸には割り軸を用い、軸首には螺鈿の細工を施している。明和の修理によって、本紙以外の表装はすべて取り替えられていて、本来のものは全く残っていない。

形状は八巻ともほぼ同様であって、保存情況はまことによい。本紙について『妙法蓮華經』第二巻を取り上げてみると、一巻の形状は次のとおりである。

藍紙を用いた上品な料紙に写經した卷子本で、天地が二八・五センチに幅が五〇・三センチ（ただし第二紙の採寸により、糊代は除外する）の料紙を、全体で二〇紙ほどを継いでいる。藍紙という料紙は、藍で染めた紙を、もう一度水に溶いて漉きあげた紙のことをいい、上品な味わいのある風合いをもっている。

あらかじめ継ぎ紙に仕立てた藍紙に、金箔を細く切った截金で界線を施し、一紙あたり二十七行、一行の字詰め十七文字の配分で、『妙法蓮華經』の本文を端正な書体で墨書している。各巻には移点について次のような跋文があって、訓点が施された時期とその親

本がうかがわれる。

妙法蓮華經卷第一

(白書) 寛治元年<sup>歲次</sup>丁卯五月九日 於興福寺上階鳥道以西第六大房

移點了 本經赤穂珣照君點本也

訓點經爲其本而已 末学沙門經朝

(朱書) 以朱處之所移點者 是明詮僧都點導本也

末学沙門經朝之

妙法蓮華經卷第三

(白書) 寛治元年<sup>歲次</sup>丁卯五月十四日移點了 但以赤穂珣照聖人

訓點經爲其本而已 末学沙門經朝

(朱書) 同二年正月之比 元興寺明詮僧都<sup>自筆</sup>點導本爲其本 大都移點了

(墨書) 墨點者以興福寺寿慶聖人點爲其本了

妙法蓮華經卷第四

(白書) 寛治元年<sup>歲次</sup>丁卯五月十六日 以赤穂珣照聖人點爲其本

移點了 処々付<sup>二</sup>音読<sup>一</sup> 是定慶聖人之読定已

末学沙門經朝

(朱書) 「」比 以元興寺明詮僧都點導本「」以朱大都移點了

「」者 不別點之 以朱読<sup>レ</sup>処<sup>モ</sup>ア<sup>リ</sup> 朱角「」所可<sup>レ</sup>読<sup>レ</sup>之 僧<sup>□□</sup>點之

(墨書) 墨ノ點<sup>□□</sup>聲等 興福寺寿慶聖人訓読而已

妙法蓮華經卷第五

(墨書) 墨之訓點并聲等 興福寺寿慶聖人點之本了

(白書) 寛治元年<sup>歲次</sup>丁卯五月十九日 以赤穂珣照聖人點爲其本

移點了 処々少付<sub>レ</sub>之定慶聖音讀了 沙門經頂

(朱書) 同二年正月之比 以<sub>三</sub>元興寺明詮僧都點導本<sub>二</sub>爲<sub>三</sub>其本<sub>一</sub> 大都移點了

若与<sub>三</sub>赤穗<sub>二</sub>同処<sub>一</sub> 不<sub>レ</sub>別點<sub>レ</sub>之 得<sub>レ</sub>其意<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>讀<sub>レ</sub>之 沙門經朝讀<sub>レ</sub>之

妙法蓮華經卷第七

(白書) 寛治元年五月廿二日 以<sub>三</sub>赤穗珣照聖人點<sub>二</sub>爲<sub>三</sub>其本<sub>一</sub>移點了

処々以<sub>レ</sub>朱付<sub>レ</sub>定慶聖音<sub>二</sub>讀<sub>レ</sub>之 末学沙門經朝

(朱書) 同二年正月之比 以<sub>三</sub>元興寺明詮僧都點導本<sub>二</sub>爲<sub>三</sub>其本<sub>一</sub>・<sup>以朱</sup>大都移點了

若与<sub>三</sub>赤穗<sub>二</sub>同処<sub>一</sub> 不<sub>レ</sub>別點<sub>レ</sub>之 朱角得<sub>レ</sub>其意<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>讀<sub>レ</sub>之 僧經朝點<sub>レ</sub>之

仏説観普賢菩薩行法經

(袖、白書) 開元録云 出深功德經中或無行法享 然云「」

羅賓沙門曇摩蜜多□法秀 以<sub>三</sub>元嘉年中所□<sub>二</sub>也 第二訳「」

(奥書、白書) 永徳三年五月廿四日 於<sub>三</sub>興福寺龍華樹院修学房<sub>二</sub>移點了 僧朝□

『妙法蓮華經』の奥書からみると、まず白点は寛治元年(一〇八七)五月九日から廿二日にかけて、ついで朱書は翌年の正月ころに、それぞれ加點されたことがわかる。墨点についてはその時期は不明であるが、時期的にはあまり隔たらないものであろう。もうひとつ注目されることは、巻第七に「不別點之朱角」とあって、角筆が用いられていることである。しかしながら、表装を修理する過程で消失したらしく、ほとんどこれを見ることはできないが、巻第四と第七にわずかに痕跡を認めることができる。これらの加點は「沙門經朝」の手になったものである。また、これらの訓点を移す元本となったものは、いずれも奈良興福寺において加點された法華經であり、移点の作業もやはり興福寺で行われたものとみられる。

この『妙法蓮華經』のうち、『仏説観普賢菩薩行法經』は他と同時期の成立であるが、加點されたのはずっと後の永徳三年(一一三三)であることを、念のために指摘しておく。なお、これらの国語学上の詳細な研究成果は、門前正彦氏の「立本寺蔵妙法蓮華經古點」(訓点語学会編「訓点語と訓点資料別刊」第四所収)等に詳しい。

全体の形状はほぼ同様であって、保存情況はまことによい。本紙については、『妙法蓮華經』第二巻が欠失しているので、前の第

一巻を取り上げてみると、一巻の形状は次のとおりである。

藍紙を用いた卷子装で、天地が二八・五センチに幅が五〇・三センチ（ただし第二紙の採寸により、糊代は除外する）の料紙を、全体で二十紙ほどを継いでいる。あらかじめ継ぎ紙に仕立てた料紙に、截金をもちいて金界を引き、一紙あたり二十七行、一行の字詰め十七文字の配分で、『妙法蓮華経』の本文を端正な書体で墨書している。

外題は題簽に「妙法蓮華経巻第一」と墨書し、内題は「妙法蓮華経序品第一」と「妙法蓮華経方便品第二」の二品が掲げられ、尾題には「妙法蓮華経巻第一」と記されている。文字についてみると、和風のみられる書体で字粒が小さく、全体的にスマートな感じを受ける。平安後期の写経として、注目すべき作例である。詳細なデータは別に掲げる。

### Ⅲ 「妙法蓮華経」一部八巻

一部八巻からなる卷子本の『妙法蓮華経』で、表紙の題簽に経題と巻数が記され、本紙には草・花・鳥・虫などの装飾が施されている。十一・二世紀の交に成立したものとみられる、平安時代の写経である。

平成八年四月、立本寺の宝物調査を実施中に、たまたま庫裡の貫主部屋から、『妙法蓮華経』一部八巻を発見した。蒔絵の箱に納めた形で床の間におかれていたが、これまで委細に調査されたことはなかったようである。少し大きめの蒔絵の経箱（覆箱）には、蓋裏に次のような銘文が金字で記されている。

光明皇后御筆妙典一部八軸者、寛

文八年夏、自石州銀山麿寺持来、予

求焉、同九年之春、加修復莊嚴、以納立

本寺永代寺宝也、尤本院之外、不可

出者也

寛文九年巳酉六月廿一日 二十一世住持日芳

此函施主信行院妙清日淨

この蓋裏の銘文を解読すると、中に納められている『妙法蓮華経』一部八巻の伝来について、いくつかの事実がわかる。

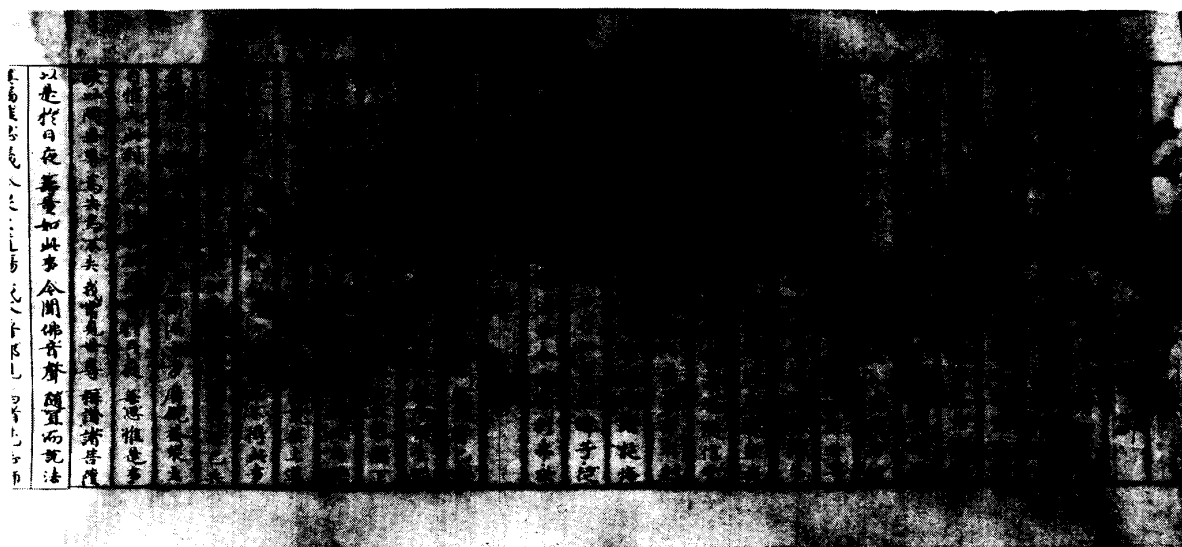
- ①この『妙法蓮華經』が光明皇后の御筆と伝える奈良写經とみられていた。
- ②寛文八年に、石見国大森銀山の廃寺から持ってきたものを、当寺二十一世住持の日芳が購入した。
- ③寛文九年の春に、表紙や軸を修復して荘嚴を加え、「立本寺の永代寺宝」として宝蔵に納めた。
- ④この蒔絵の経箱を寄進したのは、信行院妙清日浄である。

この『妙法蓮華經』を買得寄進した二十一世住持の日芳は（一四二〇〜七〇）、京都本圀寺の六条檀林に学んで、その化主をつとめた学僧である。有名な石見国（島根県）の大森銀山は、寛文年間（一六六一〜）のころになるとようやく衰運に向かい、廃寺となる寺もあらわれるようになった。そのような某寺が、恐らく戦国末の隆盛をきわめた時代に京都から購入したものを、ふたたび京都の裕福な寺院に売却をはかったのであろう。

このときに施した修理は、まず全体にわたって丁寧な裏打ちをした上で、近世初期らしい豪華な表紙と軸首をつけている。表紙には緞子を用いて題簽に經名と卷数を墨書して、見返しには金箔を張る。軸には割り軸を用い、軸首は水晶を芯にして、真鍮に転法輪と唐草模様の彫金を施している。寛文の修理によって、本紙以外の表装はすべて取り替えられていて、本来のものは全く残っていない。

形状は八巻ともほぼ同様であって、保存状況はまことによい。本紙について『妙法蓮華經』第二巻を取り上げてみると、一巻の形状は次のとおりである。

黄蘗で染めた上質の鳥の子紙を用いた卷子装で、天地が二四・九センチに幅が五二・六センチ（ただし第二紙の採寸により、糊代は除外する）の料紙を、全体



『妙法蓮華經』第二巻

で二十二紙ほどを継いでいる。あらかじめ継ぎ紙に仕立てた料紙に、銀泥をもちいて銀界を引き、一紙あたり二十八行、一行の字詰め十七文字の配分で、『妙法蓮華經』の本文を端正な書体で墨書している。しかし、残念ながら書写についての奥書はない。

外題は『妙法蓮華經卷第二』と墨書し、内題は「妙法蓮華經譬喻品第三」と「妙法蓮華經信解品第四」の二品が掲げられ、尾題には「妙法蓮華經卷第二」と記されている。文字についてみると、柔らかな和風の書体で字粒が小さく、全体的にスマートな感じを受け、十一・二世紀の写経の雰囲気をただよわせている。

本文の書写が終わると、角筆・朱・墨の三種の方法で、難読の部分に片仮名で音をあらわす読みをつけている。また、文字と仮名の間には、金銀泥を用いて草・花・鳥・虫の小さい絵が、散らして描かれている。これらの重なり具合からみると、その書き描かれた順が大体検討づけられる。

まず、鹿の角などをとがらせて作った角筆で、紙にひっかき傷をつけるようにしてカナの読みをつける。なにしろ料紙に押し跡をつけたばかりであるから、裏打ちによって消えた部分が多いものと思われるが、第一巻・第二巻・第三巻にその痕跡が見られるものの、第四巻以後には全く認められない。その後で八巻の全体にわたって、所々に墨書で、さらに一部分は角筆と重なるように朱書で読みがつけられている。

片仮名の読みをつけ終わったところで、金銀泥でワンポイントのような装飾を散らしていく。それらの絵は、忍冬唐草の花・その花に舞う蝶・飛翔する瑞鳥の鳳凰・忍冬唐草の実をついばむ鳳凰などが、画題となっている。この絵のほんの一部が、墨書と朱書の上に重なっていることから、このような読みの加筆と描画の先後がわかる。

この『妙法蓮華經』八巻の写経は、上質の料紙をもちいて銀界を施し、念を入れた端正な文字を連ねていることによって、最初から装飾経を完成させることを意図したものであることがわかる。それは金銀泥の装飾を施すことによって、最終的に完成するのであるから、角筆・墨書・朱書の書き入れは装飾以前に、しかも写経の後あまり時間を空けずに行われたことを物語る。つまり、『妙法蓮華經』の書写と、角筆・墨書・朱書の書き入れ、装飾の描画などは、ほぼ同時期に行われたことがわかる。

角筆・墨書・朱書の書き入れの書体については別表の通りで、同時代のものとみて間違いないものである。この『妙法蓮華經』一部八巻の採寸結果は、別表に掲げる。



立本寺に伝来する宝物のうち、平安時代中・後期から鎌倉時代初期にかけて制作された、『金字法華經宝塔曼荼羅圖』『藍紙法華經』『法華經』を選び、その調査結果と制作事情と伝来について述べてきた。これらを通覧すると、法華經を依經とする比叡山延曆寺の天台宗に象徴される平安仏教ではなく、いずれも南都仏教の法華經信仰の世界で成立した、優れた造形であることがわかる。

これらの作品が立本寺に移り、所蔵されるようになったのは、近世初頭のこととほぼ見当がつけられる。それは、近世に改めて強力に編成された、寺院本末体制下の一本山として、立本寺が具象的な法華經信仰によって、自己を莊嚴しようとしたことを物語っているといえよう。仏前を飾る『金字法華經宝塔曼荼羅圖』、法華經の訓読を示す『藍紙法華經』、法華經の真読の手掛かりとなる『法華經』というように、その収集方針はまことに本山らしい法華經の読誦と仏前の莊嚴を意図したものであった。

しかも、これらの法華經写經が、南都仏教における法華經の読誦とその儀礼の伝統のなかから創出されたことは、特に注目すべき事柄である。日蓮宗そのものが源流とする天台宗に対して、近世の日蓮宗が教義の面ではいうまでもなく、信仰儀礼全般にわたって独自性を主張しようとした。このような動向の中で、立本寺が南都仏教の世界で生まれた優秀な造形物を手中にしたことは、信仰儀礼の面にその影響を受けたことを示すものといえよう。奈良・平安仏教の克服の上に成立し発展したといわれる鎌倉仏教の、その後展開過程において、南都仏教の影響を受けたことを、いま一度考えてみる必要がある。

注

- (1) この研究は、平成十一年度文部省科学研究補助金（基盤研究C）による、「平安時代『法華經』写經の研究」の一部である。
- (2) 宮次男『金字宝塔曼荼羅』一九七六、吉川弘文館
- (3) 宮崎英修『禁制不受不施派の研究』一九五九、平楽寺書店、池上本門寺編『日蓮宗寺院大鑑』他。なお、本高寺宮崎英一師のご教示をいただいた。

【表の説明】

1、装丁状況

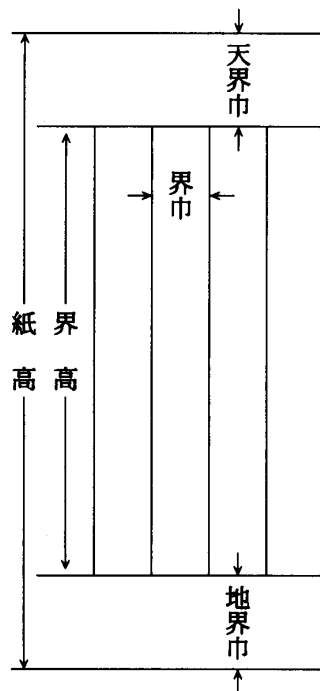
- 番号 || 立本寺所蔵「妙法蓮華経」セット番号と巻数番号
  - 経名・品名 || 当該番号の経名と品名
  - 員数 || 数量
  - 写刊 || 写本・刊本・墨書等
  - 装丁 || 卷子・折本・冊子本等の別
  - 表紙 || 表紙の幅
  - 八双 || 制作時点(原・新)・材料
  - 紐 || 制作時点(原・新)・色
  - 外題 || 外題の文言と位置
  - 見返し || 見返しの装飾
- 2、形態状況
- 首題 || 外題の文言
  - 軸・軸首 || 軸の形・材料と軸首の装飾
  - 料紙 || 料紙の種類と加工
  - 紙色 || 染め紙等
  - 装飾 || 料紙に施された装飾
  - 訓点 || 訓点の有無と加点的色
  - 奥書 || 奥書の有無
  - 音釈 || 音釈の有無
  - 時代 || 成立年代
  - 筆者 || 筆者名等
  - 保存 || 保存状態
  - 修理 || 裏打等の有無

3、寸法のデータ①

- 尾題 || 尾題の文言
- 紙高 || 料紙の天地の寸法
- 紙巾 || 第二紙の紙巾、ノリ代は除外
- 行数 || 第二紙の行数
- 界線 || 第二紙の界(罫)線の色・材料
- 天界巾 || 第二紙の天界の巾
- 界高 || 第二紙の界線の高さ
- 地界巾 || 第二紙の地界の巾
- 界巾 || 第二紙の界の巾

4、寸法のデータ②

各巻ごとの各紙巾を順にセンチで表示する(ノリ代は除外)



京都立本寺の法華經写經（中尾堯）

立本寺藏「妙法蓮華經」第一箱

1. 装丁状況

番 号	經 名・品 名	員 数	写 刊	装 丁	表 紙 cm	八 双	紐	表 紙 繪	外 題 (左・中・題簽)	見返 經繪
1-1	妙法蓮華經卷第一 序品第一・方便品第二	1 卷	墨 写 本	卷 子	19 .2	原 竹	後 銀 鼠	無	妙法蓮華經 一 左肩	箔散 繪無
1-2	妙法蓮華經卷第三 藥草喻品 第五～化城喻品第七	1 卷	墨 写 本	卷 子	19 .1	原 竹	後 銀 鼠	無	妙法蓮華經卷第三 左肩	箔散 繪無
1-3	妙法蓮華經卷第四 五百弟子 受記品第八～見宝塔品第十一	1 卷	墨 写 本	卷 子	19 .1	原 竹	後 銀 鼠	無	妙法蓮華經卷第四 左肩	箔散 繪無
1-4	妙法蓮華經卷第五 提婆達多 品第十二～從地涌出第十五	1 卷	墨 写 本	卷 子	19 .1	原 竹	後 銀 鼠	無	妙法蓮華經卷第五 左肩	箔散 繪無
1-5	妙法蓮華經卷第七 常不輕菩 薩品第二十～妙音菩薩品第二 十四	1 卷	墨 写 本	卷 子	19 .2	原 竹	後 銀 鼠	無	妙法蓮華經卷第七 左肩	箔散 繪無
1-6	妙法蓮華經卷第八 普賢菩薩 勸発品卷第二十八	1 卷	墨 写 本	卷 子	18 .6	原 竹	後 銀 鼠	無	妙法蓮華經卷第八 左肩	箔散 繪無
1-7	觀普賢菩薩經	1 卷	墨 写 本	卷 子	18 .6	原 竹	後 銀 鼠	無	觀普賢菩薩經 左肩	箔散 繪無

立本寺蔵「妙法蓮華經」第一箱

2. 形態状況

首題	軸・軸首	料紙	紙色	装飾	訓点	奥書	音積	時代	筆者	保存	修理	形態の備考
妙法蓮華經序品第一	後補割螺鈿	楮打紙	藍紙	無	墨朱白	有	無	平安後期	不明	良	無	
妙法蓮華經藥草喻品第五	後補割螺鈿	楮打紙	藍紙	無	墨朱白	有	無	平安後期	不明	良	無	
妙法蓮華經五百弟子受記品八	後補割螺鈿	楮打紙	藍紙	無	墨朱白	有	無	平安後期	不明	良	無	
妙法蓮華經提婆達多品第十二	後補割螺鈿	楮打紙	藍紙	無	墨朱白	有	無	平安後期	不明	良	無	
妙法蓮華經常不輕菩薩品第二十	後補割螺鈿	楮打紙	藍紙	無	墨朱白	有	無	平安後期	不明	良	無	
妙法蓮華經普賢菩薩勸発品第二十八	後補割螺鈿	楮打紙	藍紙	無	墨朱白	有	無	平安後期	不明	良	無	
仏説觀普賢菩薩行法經	後補割螺鈿	楮打紙	藍紙	無	墨朱白	有	無	平安後期	不明	良	無	

京都立本寺の法華經写經（中尾堯）

立本寺蔵『妙法蓮華經』第一箱

3. 寸法のデータ①

番 号	尾 題	紙 高	第二 の 紙巾	行 数	行 字 数	界 線	天 界 巾	界 高	地 界 巾	界 巾	寸 法 の 備 考
1-1	妙法蓮華經卷第一	28.5	50.3	27	17	截 金	2.5	20.3	3.1	1.9	
1-2	妙法蓮華經卷第三	25.8	50.7	27	17	截 金	2.6	20.3	2.9	1.9	
1-3	妙法蓮華經卷第四	25.8	50.9	27	17	截 金	2.6	20.3	2.8	1.9	
1-4	妙法蓮華經卷第五	25.9	50.6	27	17	截 金	2.4	20.4	3.1	1.9	
1-5	妙法蓮華經卷第七	25.8	50.7	26	17	截 金	2.4	20.4	3.0	1.9	紙幅は第 四紙
1-6	妙法蓮華經卷第八	25.8	50.4	27	17	截 金	2.3	20.4	2.9	1.8	
1-7	観普賢經	25.8	50.0	27	17	截 金	2.6	20.5	2.7	1.9	

立本寺蔵「妙法蓮華經」第一箱

4. 寸法のデータ②

各紙の紙巾
1-1 ; (1)48.7 (2)50.3 (3)50.8 (4)50.6 (5)50.8 (6)50.6 (7)50.8 (8)50.5 (9)50.8 (10) (11)52.7 (12)50.8 (13)50.8 (14)50.7 (15)50.8 (16)50.7 (17)50.6 (18)50.6 (19)50.4 (20)12.8
1-2 ; (1)48.6 (2)50.7 (3)50.9 (4)50.8 (5)50.1 (6)51.1 (7)51.2 (8)51.4 (9)51.2 (10)50.8 (11)50.9 (12)50.9 (13)51.1 (14)50.9 (15)50.8 (16)50.9 (17)50.9 (18)50.9 (19)50.8 (20)50.8 (21)48.0
1-3 ; (1)48.9 (2)50.9 (3)48.8 (4)51.0 (5)46.6 (6)51.2 (7)51.1 (8)31.9 (9)15.8 (10)50.8 (11)50.9 (12)50.9 (13)59.9 (14)23.7
1-4 ; (1)48.6 (2)50.6 (3)50.7 (4)50.6 (5)50.5 (6)50.6 (7)50.5 (8)50.6 (9)50.8 (10)50.5 (11)50.8 (12)50.4 (13)50.5 (14)50.6 (15)50.7 (16)50.7 (17)50.7 (18)50.7 (19)50.5 (20)51.0
1-5 ; (1)48.9 (2)14.4 (3)7.6 (4)50.7 (5)50.6 (6)50.6 (7)50.7 (8)50.6 (9)51.1 (10)50.6 (11)50.5 (12)50.6 (13)50.6 (14)50.7 (15)46.7
1-6 ; (1)13.1 (2)50.4 (3)50.8 (4)50.9 (5)36.5 (以下欠)
1-7 ; (1)50.4 (2)50.0 (3)51.0 (4)51.0 (5)50.8 (6)50.8 (7)51.0 (8)51.0 (9)51.1 (10)51.2 (11)51.2 (12)51.2 (13)51.1 (14)51.0 (15)50.8 (16)29.4

京都立本寺の法華經写經（中尾堯）

立本寺蔵『妙法蓮華經』第二箱

1. 装丁状況

番 号	經 名・品 名	員 数	写 刊	装 丁	表 紙 cm	八 双	紐	表 紙 絵	外 題 (左・中・題簽)	見返 經絵
2-1	妙法蓮華經卷第一 序品第一・方便品第二	1 卷	墨 写	卷 子	20 .6	原 竹	後	無	妙法蓮華經 一 左肩	なし
2-2	妙法蓮華經卷第二 比喻品第三・信解品第四	1 卷	墨 写	卷 子	21 .6	原 竹	後	無	妙法蓮華經 二 左肩	なし
2-3	妙法蓮華經卷第三葉草喻品第 五授記品第六化城喻品第七	1 卷	墨 写	卷 子	22 .0	原 竹	後	無	妙法蓮華經 三 左肩	なし
2-4	妙法蓮華經卷第四 五百弟子 受記品第八～見宝塔品第十一	1 卷	墨 写	卷 子	21 .3	原 竹	後	無	妙法蓮華經 四 左肩	なし
2-5	妙法蓮華經卷第五 品十二～從地涌出第十五	1 卷	墨 写	卷 子	22 .0	原 竹	後	無	妙法蓮華經 五 左肩	なし
2-6	妙法蓮華經卷第六 如来寿量 品第十六～法師功德品第十九	1 卷	墨 写	卷 子	22 .1	原 竹	後	無	妙法蓮華經 六 左肩	なし
2-7	妙法蓮華經卷第七 常不輕菩 薩品第二十～妙音菩薩品第二 十四	1 卷	墨 写	卷 子	22 .0	原 竹	後	無	妙法蓮華經 七 左肩	なし
2-8	妙法蓮華經卷第八 觀世音菩 薩普門品卷第二十五～普賢菩 薩勸発品卷第二十八	1 卷	墨 写	卷 子	22 .0	原 竹	後	無	妙法蓮華經 八 左肩	なし

立本寺蔵「妙法蓮華經」第二箱

2. 形態状況

首 題	軸・ 軸首	料 紙	紙 色	装 飾	訓 点	奥 書	音 积	時代	筆 者	保 存	修 理	形態の備考
妙法蓮華經序品第一	後補 割	烏 子	黄 藥	烏 草	墨 角	無	朱 点	平安 後期	不 明	良	無	角筆あり 片仮名訓点
妙法蓮華經比喻品第三	後補 割	烏 子	黄 藥	烏 草	墨 角	無	朱 点	平安 後期	不 明	良	無	角筆あり 片仮名訓点
妙法蓮華經藥草喻品第 五	後補 割	烏 子	黄 藥	烏 草	墨 角	無	朱 点	平安 後期	不 明	良	無	角筆あり 片仮名訓点
妙法蓮華經五百弟子受 記品第八	後補 割	烏 子	黄 藥	烏 草	墨 角	無	朱 点	平安 後期	不 明	良	無	片仮名訓点
妙法蓮華經提婆達多品 第十二	後補 割	烏 子	黄 藥	烏 草	墨 角	無	朱 点	平安 後期	不 明	良	無	片仮名訓点
妙法蓮華經如来寿量第 十六	後補 割	烏 子	黄 藥	烏 草	墨 角	無	朱 点	平安 後期	不 明	良	無	片仮名訓点
妙法蓮華經常不輕菩薩 品第二十	後補 割	烏 子	黄 藥	烏 草	墨 角	無	朱 点	平安 後期	不 明	良	無	片仮名訓点
妙法蓮華經觀世音菩薩 普門品卷第二十五	後補 割	烏 子	黄 藥	烏 草	墨 角	無	朱 点	平安 後期	不 明	良	無	片仮名訓点



京都立本寺の法華經写經（中尾堯）

立本寺蔵『妙法蓮華經』第二箱

3. 寸法のデータ①

番 号	尾 題	紙 高	第二 の 紙巾	行 数	行 字 数	界 線	天 界 巾	界 高	地 界 巾	界 巾	寸 法 の 備 考
2-1	妙法蓮華經卷第一	24.9	49.0	26	17	銀	2.5	19.4	2.9	1.9	
2-2	妙法蓮華經卷第二	24.9	52.6	28	17	銀	2.6	19.4	2.9	1.9	
2-3	妙法蓮華經卷第三	24.9	52.7	28	17	銀	2.5	19.4	2.9	1.9	
2-4	妙法蓮華經卷第四	24.9	52.5	28	17	銀	2.4	19.5	3.0	1.9	
2-5	妙法蓮華經卷第五	24.9	52.8	29	17	銀	2.3	19.5	3.1	1.9	
2-6	妙法蓮華經卷第六	24.9	52.5	28	17	銀	2.5	19.5	2.9	1.9	
2-7	妙法蓮華經卷第七	24.4	52.6	28	17	銀	2.6	19.5	2.8	1.9	
2-8	妙法蓮華經卷第八	24.4	50.3	27	17	銀	2.5	19.4	3.0	1.9	

立本寺蔵『妙法蓮華經』第二箱

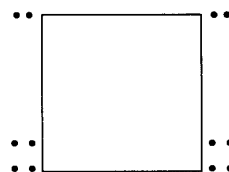
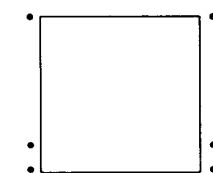
4. 寸法のデータ②

各紙の紙巾
1-1 ; (1)48.8 (2)49.0 (3)50.8 (4)52.4 (5)52.5 (6)52.7 (7)52.6 (8)52.7 (9)52.4 (10)52.7 (11)52.5 (12)52.5 (13)52.7 (14)52.5 (15)52.6 (16)52.7 (17)50.7 (18)52.2 (19)29.9 (20)
1-2 ; (1)50.3 (2)52.6 (3)52.8 (4)52.8 (5)52.8 (6)52.7 (7)52.8 (8)52.8 (9)52.7 (10)52.8 (11)53.2 (12)52.8 (13)52.9 (14)52.8 (15)53.0 (16)53.1 (17)53.0 (18)53.1 (19)53.2 (20)52.8 (21)52.3 (22)18.7
1-3 ; (1)52.2 (2)52.7 (3)52.6 (4)52.8 (5)52.7 (6)52.8 (7)52.8 (8)52.7 (9)52.7 (10)52.8 (11)52.8 (12)52.8 (13)52.8 (14)52.8 (15)52.8 (16)52.6 (17)52.7 (18)52.7 (19)52.6 (20)50.4 (21)5.5
1-4 ; (1)50.4 (2)52.5 (3)52.4 (4)52.5 (5)52.8 (6)52.8 (7)52.7 (8)52.9 (9)52.9 (10)52.5 (11)52.6 (12)52.7 (13)52.7 (14)52.7 (15)48.5 (16)52.9 (17)50.6 (18)35.7
1-5 ; (1)50.8 (2)52.8 (3)52.9 (4)52.8 (5)52.8 (6)50.8 (7)52.8 (8)52.6 (9)52.8 (10)50.9 (11)51.1 (12)52.6 (13)52.8 (14)48.8 (15)51.2 (16)52.6 (17)50.8 (18)48.6 (19)48.6 (20)26.2
1-6 ; (1)50.3 (2)52.5 (3)52.8 (4)52.7 (5)52.7 (6)52.9 (7)52.8 (8)50.6 (9)51.1 (10)52.8 (11)52.8 (12)52.8 (13)52.6 (14)52.8 (15)50.8 (16)50.5 (17)50.8 (18)52.6 (19)35.5
1-7 ; (1)50.9 (2)52.6 (3)53.0 (4)52.7 (5)52.9 (6)52.8 (7)52.8 (8)52.8 (9)52.9 (10)52.7 (11)53.0 (12)53.0 (13)52.8 (14)52.7 (15)50.9 (16)50.6 (17)52.7 (18)10.8
1-8 ; (1)46.4 (2)50.3 (3)52.4 (4)52.4 (5)29.5 (6)48.5 (7)47.1 (8)18.6 (9)39.1 (10)13.6 (11)12.9 (12)52.3 (13)52.7 (14)52.4 (15)52.5 (16)52.6 (17)51.9 (18)50.6 (19)13.2

京都立本寺の法華經写經（中尾堯）

ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
キ	リ	キ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	
キ	リ	キ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	
ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	
ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	
エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	
エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	
ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	
ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	

2、仮名字体表



立本寺蔵 『妙法蓮華經』八卷（第二箱）漢字音注記表  
1、朱点による声点